

シャーデンフロイデと共感性の関連-潜在連合テストを用いての検討-

HP25-0080F 井口聖香

問題・目的

妬みやシャーデンフロイデ(ざまあみろ)といった感情は]普遍的な感情であるにも関わらず、人々は当然のように隠しています。心理学における研究も少なく、シャーデンフロイデの研究は不十分であるといえます。そこで今回は、共感性に注目し、関連を検討しました。鈴木・木野(2008)の多次元共感性尺度は「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向的反応」の5つの因子に分かれています。本研究では特に他者指向的反応と自己指向的反応に注目して仮説を立てました。シャーデンフロイデを喚起しやすい人は、他者が不幸になった場面を見ると「自分が不幸にならなくてよかった」と自分中心に考えるため、自己指向的反応の得点が高く、シャーデンフロイデを喚起しにくい人は、他者が不幸になった場面を見ると「かわいそう」と他者のことを考え同情的な感情を感じるため、他者指向的反応の得点が高くなると予測しました。

方法

大学生 61 名(男性 26 名, 女性 35 名)を対象に、妬み喚起シナリオおよびシャーデンフロイデ喚起シナリオを読ませ、シャーデンフロイデを測定する潜在連合テストを実施しました。その後、各質問紙への回答を求めました。潜在連合テストに使用するカテゴリー語や刺激語は澤田(2003, 2008)の他者の不幸に対する感情尺度に用いられている項目から選定しました。使用したシナリオは、大学生にとって重要だと考えられる「学校・職場」の領域に限定し、作成した。自己記述におけるシャーデンフロイデをそくていするため、澤田(2008)の他者の不幸な出来事に対する感情尺度を使用しました。共感性、社会的望ましさの測定には、鈴木・木野(2008)の多次元共感性尺度と Crowne & Marlowe(1960)が作成し北村・鈴木(1986)が翻訳した日本語版 Social Desirability Scale をそれぞれ使用しました。

結果と考察

潜在連合テストで測定したシャーデンフロイデの指標として、D-score(Greenwald et al, 2003)を算出しました(以下、IAT 得点)。IAT 得点と共感性および下位 5 因子の関連を検討した結果、自己指向的反応のみ有意な負の相関がみられました。自己指向的反応と短気と正の相関があることから、短気の人にはシャーデンフロイデを喚起しにくい可能性が示唆されました。シャーデンフロイデの喚起傾向は感情の表出と関連している可能性が示されました。

本研究ではシナリオ場面を 1 つに設定したが、個人によって重要視する領域は異なるため、複数の場면을提示する必要があると思います。

これまでのシャーデンフロイデの研究は一時的にシャーデンフロイデを喚起させているが、喚起傾向などを検討する場合には、状態としてのシャーデンフロイデよりも、特性としてのシャーデンフロイデを測定することが望ましいと考えられます。